



# What's SURF MUSIC?

流行のサーフミュージックを探る?

サーフィンのスタイルも時代によって様々な流行があるように、音楽にも流行がある。街のCDショップに行けば、その動向を知ることは容易だ。しかし、サーフィンのスタイルにしても音楽にしても、好みや捉え方は人それぞれ…。そこで、ここ数年、破竹の勢いでセールスを伸ばしてきたサーフミュージックについて、SURF1st流に検証してみることにした。

○文: 岡田修平 / 井澤聡朗 / 井上太一 / 清水雅裕  
Text: Shuhei Okada, Toshiro Inoue, Taichi Inoue, Masahiro Shimizu

Top Art / 新倉孝雄 (アーティスト/写真家/オーナー)  
サーフィン歴15年、スケート歴長年。親友公園にある新倉のオーナーでありペインティングアーティストとしても活躍中。音楽イメージに絵を描く、新しいスタイルのドローイング画を開発する新進気鋭アーティスト。http://blog.livedoor.jp/nissankou/



オフショールにたいトラックを創りジャック・ジョンソン。音楽シーンでの活躍は別として、これだけスタイリッシュなサーフィンを習得せられたら、誰だって感動です。  
Jack Johnson, O.T.W. Photo: Joli

## 「今さらながら“サーフミュージック”って何？」

井上太一 / サーフロック・インターナショナル代表取締役

時今よく耳にするようになった気がする「サーフミュージック」とか「サーフロック」という言葉。皆さんもどこかで読んだり聞いたことがあるのではないのでしょうか。ジャック・ジョンソンというサーフミュージック界のアイコンの世界的大ブレイクをきっかけに、ドノヴァン・フランケンレイター、Gラヴ、トリスタン・プリティマン、マット・コスタ、ボウ・ヤング、ウィル・コナーといった、結果ジャックの切り開いた道のフォロワーとなるミュージシャン達が挙って雑誌やラジオ、またCD販売店、更にはCDを取り扱うサーフショップを盛り上げていきました。今年もその勢いは止まらず、昨年のフォー・ファイターズの全米公演や、先頃行なわれたドノヴァンの来日公演で前座に大活躍されたティミー・カランや、フィルム・ディレクター兼ミュージシャンとして本格的な活動を開始したデビッド・ラストピッチといったプロサーファーの音楽メジャーデビューも決定しているとか。そんなサーフミュージック・シーンの中心人物、ジャック・ジョンソンにおいてはアルバム毎にその実力と人気を世界中で賞賛するものとし、いわゆる一発屋的な流行で終わらせなかったのがその「シーン」の確立を確かなものとしたと言えるでしょう。音楽のデジタル化とテクノロジーの進歩により着実に縮小の一途を辿っている音楽業界、特に日本での洋楽市場において、この「サーフミュージック」と言う、言わば新ジャンルの発達はここ数年の一つの明るい話題となったのです。

そのようにしていつの間にか存在するようになったサーフミュージックというジャンル。でもいった

い何を持ってサーフミュージックと呼べるのでしょうか。音楽のジャンルというのはレコード会社やお店など売る側の都合で付けられているのが現実のところ。ジャンルなんて本来はあってないようなものです。実際に「ミクスチャー」と言うジャンル(?)に表されているように、音楽をカテゴライズすることは到底不可能。なぜなら音楽は全て「ミクスチャー」だから。音楽は色々な音楽に影響されて生まれるのがその在り方で、それが今では、ヒップホップ・レゲエ・パンクだのニューウェイブ・メタル・コアだのニュースクール・ハードコアだの、その中でもニュー・ヨーク派vsポストン派があるとか、アメリカ派vsイギリス派とかがあるらしんだけど、もうそんなのハッキリ言ってもうどうでも良いです。

話は戻ってサーフミュージックですが、サーフミュージックってサーファーが奏でる音楽なのか、それともサーファーが好んで聴く音楽なのか、どうもいまもよくわからないところ。ジャック・ジョンソンはサーファーで、まだ誰もジャックのことを知らなかった数年前のデビュー当時はごく一部のサーファーのみが知る存在。ドノヴァンに関してはあまりにもサーファーとして有名なため、当初はミュージシャンであることはあまり知られていませんでした。今でもジャックやドノヴァンのファンにはサーファーの比率がとても多いのです。ということは、サーファーが聴く、サーファーが奏でる音楽が真のサーフ・ミュージックということになるのでしょうか?

かつて無い広範囲でサーフィンという文化が広まった1960~70年代の日本、当時のサーファーはベ

ンチャーズに代表される音楽を好んで聴いていました。その後、ハワイアン・ブームも相成ってカラパナなどが夏の、そしてサーファーの定番に。レゲエも好んで聴かれ始めたのもこの頃と言われています。その後90年代以降はサーフィンのニュースクール化によってサーファーの聴く音楽も激変。より早く、よりハードなニュースクール・サーファー世代はヘビメタ全般、更にはレッチリ、サブライム、スマパンなどに代表されるハード・ロックを求め、その時代のサーフィン・ビデオのBGMの定番となり、続いてより速いBlink 182などに代表されるニュースクール・パンクが主流になり……って続いて行くのですが、考えてみると今ここに挙げたアーティスト達、もちろんここに書き入れなかったサーファー好みのアーティストも含め、時代時代のサーファーにとっては、実はこれら全部サーフミュージックと呼ばれるのです。もちろん山崎山三もサザンも山下達郎もチューブも、Del Techだって人によってはサーフミュージックだと思います。

「サーフミュージック」、色々考えると、それはサーファーにとって楽しくて心に響いて気持ちの良い音楽、ってことなのかなと思います。そしてそれは、実は本来の「音楽」というものなのではないのでしょうか。

最近CD買った人、少ないでしょうか。昔のように胸をワクワクさせながらお目当てのアルバムを探したり、ジャケットを気に入って思わず買ったCDを家でドキドキしながらPlayボタンを押す瞬間、最高にかっこいい音楽に巡り会った時のあの感動、友達に勧める興奮などを思い出してください。パドル・アウト前のアゲアゲな元気チューン、波待ちの間に勝手に頭に流れる憂鬱(?)音楽、アフターサーフのメロウ・チューン。言わば音楽はサーフィンの一部です。でしょ? 皆さん、たまにはCDでも買ってみませんか? □

「歌舞伎、狂言、能楽って類なの、下から、知ってた？ 庶民は見れないの、使楽ってのは、昔は、スーパーセレブしか見れない。狂言がまあセレブ。能はスーパーセレブオンリー。高いレベルにいるから。うるさいですよ、しきたりは悪い。それを落として、(ヒデ/ ZREBRAと)二人で、俺の先生を、「俺はヒップホップです」って。ヒップホップの中に俺もあるし、能の中にヒップホップもあると、高い次元で繋がってるって話したら「間違いないです」って。若い時に、今のフィルターを通じてそういうものを紹介しないと残れないしい。俺らを通じて少しでも俺を知ってもらえたら良い。で今、南と蔵さんとかで歌舞伎にやられちゃってる感あるんですよ、でも俺ってのもあるから。日本人全員としてこれを残すかどうかってことさ、俺が、いいのは、その文化を。昔は皇族が観てて、その次は戦国時代に武士が観てて、武士が育てた芸術なんですけども、今の時代となって、今はそういうセレブが育ててんだけど、俺らの次の世代に残すの？ どうなの？ 実際歌舞伎観に行ってますか？ みたいなさ。残してんのかどうなのかもよくわからないじゃん。今の時代にそのメッセージ伝わってるかどうか。これを見てそのまま伝わるかどうかかわからないけど、俺らの血の持ってたものだから。どういう人間がこういうものを認めて残していくとか、そういう文化どうするのかって意味も含めて今回こういう風にコラボレートしたんですけどね」

「日本の伝統を残すって感じ？」  
「アメリカの人間とかカンファーマンみたいな着物を着せてラップしたりとかやってんすよ。だけどそれは形だけじゃないですか。俺らは血にも流れてるし、スピリットとしてあるものだから。そういうので勝負した時に、あっちの人間が見た時には俺らはこれがリアルだからさ。あいつらは着物を着てやれるけど、俺らは超リアルだから。みたいなところでもう少しリスペクトもいただきたいし、あっちから、っていう意味も込めてんすけど」

—これはStill Neva Enuffってこと？  
「そうです、Still Neva Enuffです」  
—この曲は6年前とか7年前にあった曲だよな？  
「それは2曲目のやつです、これの。カップリング曲がそうなんすけど。その6年前にあった曲の、Neva Enuffの、part2って感じす。part2っていうよりは、Still Neva Enuffなんですよ(笑)」

あの世とこの世がぶつかる場所らしい。

—能とのセッションっていうのはいつひらめいたの？  
「この正月ぐらいかな。去年の終わりですね。ミーティング始まったぐらいから。色んなことを考えて、どういうふうにならしたらいかな、まあ加本目ぐらいにビデオもなっちゃってたんで。前回はもうちょいストリート寄りな落としてたから、今回どうしようかなって。俺ら二人だし、ZREBRAもその6年で上げた地位とステータスってのもあるから。なにかこう表現できる良い所はないかっていうことになったんですけど」

—能の先生とはどうやって繋がったの？  
「場所を借りて、その場所の人から紹介してもらって。フレキシブルな先生はいないかって、俺らと同じぐらいの歳で、そしたら紹介してくれて。その先生と話して」

—そしたら集ってくれたんだ？  
「そうです。やりましようって。ただやっぱり、君達のそのスタイルで来られても困るしと。いや全然もう俺ら紋付き袴で行きますよと。歩み寄りしながら、俺らの曲に型もつけてくれたし。じゃあ俺らも紋付き袴で。あそこはもう白足袋しか駄目ですよ。舞足も駄目だし靴も駄目だし。白足袋オンリーなんですよ。あそこの上って。なんかあの世とこの世がぶつかる場所らしいです。観賞するらしい。あの橋を渡ってきて、あの世とこの世があそこで繋がり合ってるっていうのが俺のステージなんすけど、すごい聖なる所。神社っぽいバイブスですね。でもま

あ俺らの書いた詞もシリアスにやってるし誰に言っても恥ずかしくないから、ここでやらしてもらいますっていう。ハンパない高い次元の戦いでした。ただ同じ年ぐらいで、そうやって能っていうことで繋がってる人だし、同じジェネレーションを生きてきて、違う表現だけど、すごい「あぁ一緒にだな」って感じだし、そういう意味では」

—舞ってるのは先生？ (PVを見ながら)  
「そうですね、先生ですね、舞ってるのは」  
—場所はどこの、撮影した？

「埼玉です。埼玉に越谷市が市でやってる能楽堂があるんですよ。当時のまなまを、そのまま再現した近代の作りです。石の置き方とか、建て方が全部当時のまなまを再現した近代建物ですね。もう残ってないみたいです、日本に1個も、外で本物は。奈良かなんかの中に1個あるぐらいで。その発祥の地ってのがあるんですけど、そこも燃えちゃったりとかしてなくて、全部」

—で埼玉に再現して造った所がある？  
「あるんですよ。すっげーでかい敷地で」  
—そこが今中心なの？

「中心じゃないみたいですけど、外でやるっていう所はないですよ。薪能ってやつで外で大笑いでやるっていう。実際セルリアンの下とか下じゃん。いわゆるステージじゃん、スポットライトとかでやる。火も焚けないし、月の光だったりとか、夜外でやれるっていうのはそこしかないみたいです」

—ライティングに火を使ってるんだ？  
「あれ火です。まあちょっと加えてますけど。薪能ってやつです。武士が陣に行く前に舞う舞です、あれは。それを俺ら用にちょっと改良してもらって。俺らの曲用に。信長とかがすごい好きで舞ってたらいいですね。織田信長とか。勝頼の舞ってやつです」

—じゃあクロード自身も能の人と会って話めたんだ？  
「そうです。俺監督だったから、だいぶ話も聞いて」



○インタビュー：赤井得士 | ○写真：三浦安岡  
Interview: Tokushi Akai | Photo: Yasuoka Anaka

○協力：スローダイス (http://www.throwdice.com/) |  
Special Thanks: Throw Dice

インタビューは唐突に始まった。「THROW DICE」店内に流れるPVの中で、クロードは紋付き袴姿、日本語でラップしていた。それをBGVにクロード語録が収録された。それは今年の2月2日、藤沢駅(神奈川)近くでの話だ。

AKTION (a.k.a・真木蔵人)、今を語る。

# 猛語録